CONTENTS

Chapter 5 仕事の現場 実況中継

出版翻訳（加藤洋子）…… 74
産業翻訳（寺崎和隆）…… 76
映像翻訳（岡田壯平）…… 78
放送通訳（鶴田知佳子）…… 80
通訳ガイド（ランデル洋子）…… 82

● KAWARABAN TIMES ……84

Chapter 6 理論と実践をどこで学ぶか？

立教大学大学院 …… 88
神戸女学院大学大学院 …… 89
津田塾大学 …… 91
東海大学エクステンションセンター …… 92
明海大学 …… 94

［スクール紹介］通訳・翻訳スクールで始めるキャリアへの道 …… 95

Chapter 7 現場で役立つ力をつけるには？

通訳を教える人に聞く めざす力（鳥飼玖美子）…… 122
字幕を教える人に聞く 学ぶ方法（森澤海郎）…… 126

●プロになってもこんな勉強しています！…… 125/128/131
●こんなとき便利なOnline辞書・事典 …… 129
●通訳・翻訳 能力・資格試験リスト …… 132

Chapter 8 訳者が自ら語る この翻訳書の読みどころ

ノンフィクション／ビジネス／社会／サイエンス／心理／
文芸／ミステリ／ヤングアダルト／ファンタジー／絵本 …… 139

●巻末――ジャパンタイムズがすすめる通訳・翻訳会社（求人情報つき）…… 150

The Japan Times
語学を仕事にするための
通訳・翻訳キャリアガイド 2008

CONTENTS

巻頭 言葉のプロとしての責任

Interview
住吉美紀（NHKアナウンサー）…… 12
池澤夏樹（作家）…… 15
Essay
太田直子（字幕翻訳者）…… 18

Chapter 1 通訳・翻訳の仕事とは？

ひと目で分かる翻訳MAP …… 22
ひと目で分かる通訳MAP …… 24
通訳・翻訳分野別ファイル …… 26

Chapter 2 プロになるまでの現実

プロとしてのスタートラインをめざして
Part 1 スクールで学ぶ …… 34
Part 2 企業で働く …… 36
●プロになるまでにお金と時間をいくら掛けるか？ ……39

プロとアマ、ここが違う
●出版翻訳――加賀山卓朗 …… 40
●産業翻訳――菅原 栄 …… 41
●映像翻訳――三田眞由美 …… 42
●通訳――――榊原奈津子 …… 43
●通訳ガイド――矢木野さか恵 …… 44

Chapter 3 プロになってからの現実

業界関係者・エージェントに聞く！ プロに求める「実力」そして「現実」…… 48
［翻訳者・通訳者アンケート］プロになってからの現実…… 56

● KAWARABAN TIMES ……60

Chapter 4 これがプロの技！

スペシャル対談 酒井昭伸 vs 中村融 プロが認めるプロの技…… 62
インタビュー 篠田顕子 ベテラン通訳者が語るプロの証 …… 66

Interview

あなたのことが知りたい——その強い思いが本音の言葉を引き出すんです

NHKのオフィシャルサイトでブログを書いている住吉さん。「最近は書くことにも興味が出てきました。話すコミュニケーションでの試行錯誤が書くときのヒントになることもあるし、書くときに試行錯誤をすると、話すときの言葉選びに生きるような気がしています」

とっておきの質問は本番までとっておく

NHK『プロジェクトX～挑戦者たち』の後継番組として、2006年1月にスタートした『プロフェッショナル～仕事の流儀』。毎回、各界のプロフェッショナルをスタジオに招き、その仕事ぶりを映像で紹介しながら、各人の仕事の流儀に迫るドキュメンタリーだ。この番組で、脳科学者の茂木健一郎さんとともにキャスターを務めているのがNHKアナウンサーの住吉美紀さん。脳科学的見地からの茂木さんの鋭い突っ込みもさることながら、住吉さんのまっすぐな物言いもおおいに視聴者の共感を得ている。

「それはなぜですか?」「それはどういうことでしょう?」「やめちゃおうと思ったりしませんでしたか?」——住吉さんから繰り出される質問は、いつもストレートだ。それゆえ、テレビの前にいる視聴者が「そこが聞きたい」と思っているところを突く。茂木さんの投げる変化球と、その合間に放り込まれる住吉さんの直球。ゲストは、2人の投げるボールを一つひとつ返す過程で、これまで到達したことのなかった領域まで自らの仕事を掘り下げる。人前で話し慣れているはずの経営者の口からは、今まで語ったことがないかもしれない本音の言葉がこぼれ、一方、これまであまり自らを語ってこなかっただろう寡黙な職人は、自分を語る言葉を探し当てていくのだ。

この番組に限らず、仕事上、人に話を聞く機会の多い住吉さんが、話を聞く立場の人間としていつも心掛けているのは、「知りたい」という気持ちを持ち続けることだと言う。

「相手から言葉を引き出すときに最も大切なのは、『あなたのことが知りたい』『聞きたい』『教えてください』という強い思いだと思うんです。その思いを態度で示せば、たとえ話すのが苦手な人でも一生懸命説明してくださる。少ない言葉の中にも、その方の本気がにじみ出ます。そんな言葉が聞けたときには本当に感動するし、自分の心が動いたときには、見てくださっている多くの人の心も動いているんじゃないかなと思うんですよね」

好奇心を持ち続けるため、取材相手に関する資料を読み込む際にも、事実の部分は読んでも、気持ちを表すものはなるべく目を通さない。とっておきの質問は、あえてディレクターに聞かずに本番にとっておく。事前に答えを知ってしまうと、その場で「へぇ～」と感心して、本番では本心からの興味を持って聞くことができなくなってしまうからだ。こうした住吉さんの姿勢は、何より番組で見せる子どものような好奇心いっぱいの瞳が雄弁に語っていると言えるだろう。

余談だが、住吉さん自身がプロの仕事の現場をレポートする「仕事術スペシャル」ではこんなこともあった。プロの料理人が手間を掛け、愛情を込めて丁寧に炊いた白飯を口にし、そのおいしさに思わず涙してしまったのである。住吉さんの感動に触れた料理人は飛び切りの笑顔を見せた。住吉さんには、こんな逸話がいくつもある。

物怖じしない態度は海外暮らしの恩恵?

しかし、「率直である」「率直に聞く」というのは、簡単なようで実は意外と難しい。「こんなこと聞いたら相手に嫌われるんじゃないか」「無知だと思われるんじゃないか」「失礼じゃないか」——そんな危惧を抱いて直球勝負ができなかった経験は誰にでもあるのではないだろうか。

しかし、住吉さんには確固たる仕事観がある。

「聞く立場にありながら、自分が嫌われるかもしれないという理由で、視聴者が知りたいはずのことを聞かないのは、仕事の放棄だと思うんですよね。なんのために自分がそこにいるのかを考えれば、当然聞く責任があるはず。

住吉美紀

NHKアナウンサー

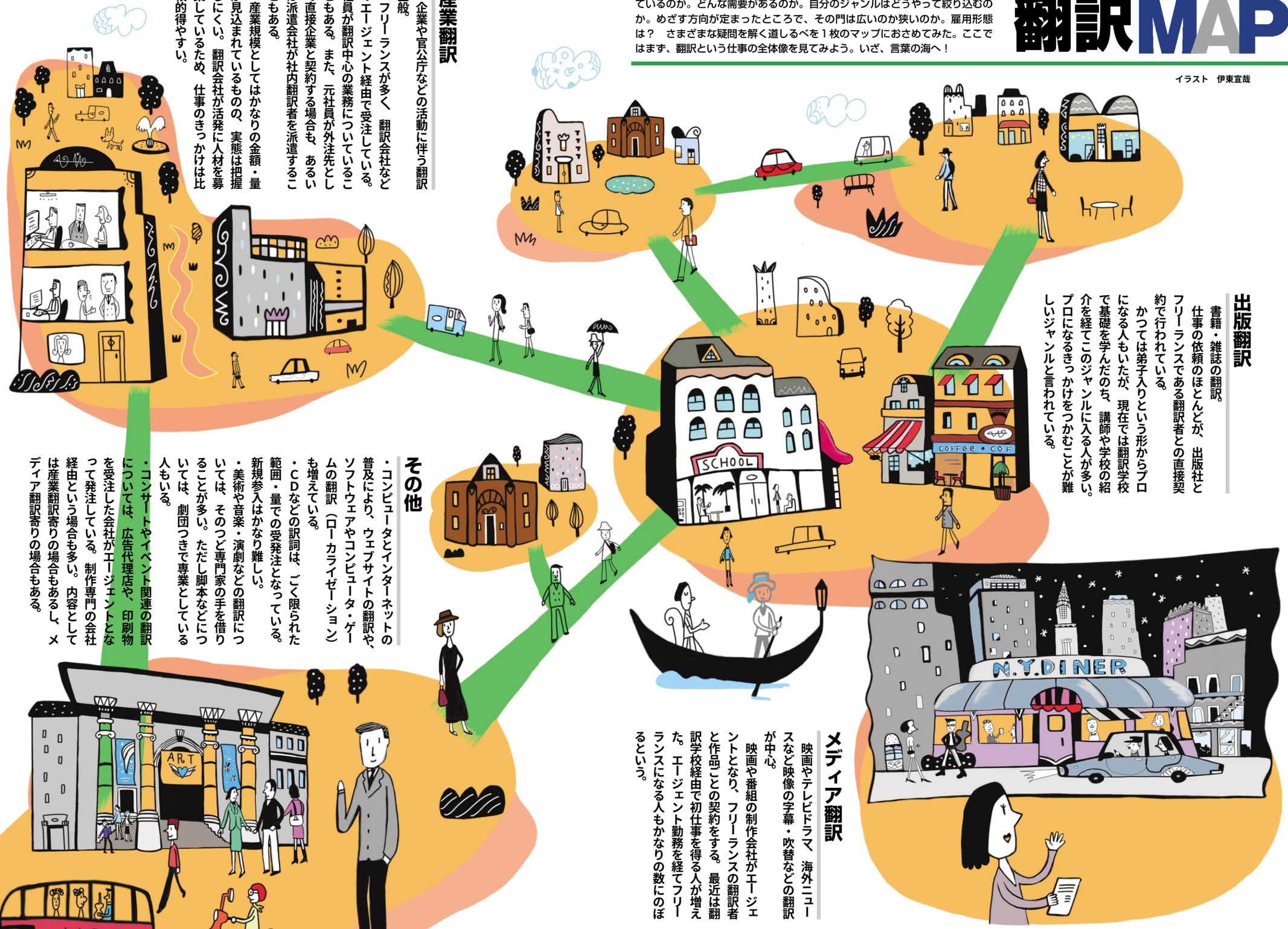
取材・文　佐藤淳子
写真　遠藤貴也

Miki Sumiyoshi
1973年、神奈川県生まれ。商社勤務だった父親の仕事の関係で小学校の4年間をアメリカ、高校3年間をカナダで過ごす。国際基督教大学卒業後、NHK入局。福島放送局、仙台放送局を経て01年より本局勤務。現在、『プロフェッショナル～仕事の流儀』のほか、『アートエンターテインメント 迷宮美術館』『地球アゴラ』などでキャスターを務める。語学力を生かし、海外からの生中継番組でも活躍。

ひと目で分かる 翻訳MAP

「翻訳を仕事にしたい」。そうは言っても、実際の翻訳者はどうやって仕事を得ているのか。どんな需要があるのか。自分のジャンルはどうやって絞り込むのか。めざす方向が定まったところで、その門は広いのか狭いのか。雇用形態は？　さまざまな疑問を解く道しるべを１枚のマップにおさめてみた。ここではまず、翻訳という仕事の全体像を見てみよう。いざ、言葉の海へ！

イラスト　伊東宣哉



産業翻訳

企業や官公庁などの活動に伴う翻訳全般。

フリーランスが多く、翻訳会社などのエージェント経由で受注している。社員が翻訳中心の業務についていることもある。また、元社員が外注先として直接企業と契約する場合も、あるいは派遣会社が社内翻訳者を派遣することもある。

産業規模としてはかなりの金額・量が見込まれているものの、実態は把握しにくい。翻訳会社が活発に人材を募集しているため、仕事のきっかけは比較的得やすい。

出版翻訳

書籍・雑誌の翻訳。

仕事の依頼のほとんどが、出版社とフリーランスである翻訳者との直接契約で行われている。

かつては弟子入りという形からプロになる人もいたが、現在では翻訳学校で基礎を学んだのち、講師や学校の紹介を経てこのジャンルに入る人が多い。プロになるきっかけをつかむことが難しいジャンルと言われている。

メディア翻訳

映画やテレビドラマ、海外ニュースなど映像の字幕・吹替などの翻訳が中心。

映画や番組の制作会社がエージェントとなり、フリーランスの翻訳者と作品ごとの契約をする。最近は翻訳学校経由で初仕事を得る人が増えた。エージェント勤務を経てフリーランスになる人もかなりの数にのぼるという。

その他

・コンピュータとインターネットの普及により、ウェブサイトの翻訳や、ソフトウェアやコンピュータ・ゲームの翻訳（ローカライゼーション）も増えている。

・CDなどの訳詞は、ごく限られた範囲・量での受発注となっている。新規参入はかなり難しい。

・美術や音楽・演劇などの翻訳については、そのつど専門家の手を借りることが多い。ただし脚本などについては、劇団つきで専業としている人もいる。

・コンサートやイベント関連の翻訳については、広告代理店や、印刷物を受注した会社がエージェントとなって発注している。制作専門の会社経由という場合も多い。内容としては産業翻訳寄りの場合もあるし、メディア翻訳寄りの場合もある。

翻訳者の雇用形態

●フリーランス

すべてのジャンルにある。顧客と直接取引の多い出版翻訳以外のジャンルは、エージェント経由で仕事をしている場合が多い。

●社員・契約社員

メディア翻訳、産業翻訳の分野に多い。企業やエージェントに勤務し、その後独立してフリーランスになる人もいる。

●派遣社員

派遣会社経由で企業に派遣されている。産業翻訳が中心だが、その数は多くない。

●副業として

全ジャンルにある。本業と翻訳する業種や内容がリンクしている場合が多い。

資格

産業翻訳の分野ではいくつかあるものの、それがなくては仕事ができないというものはない。実力の目安という位置づけ。TOEICなど外国語の検定や資格で高得点をおさめていても、「翻訳の実力とは別」という声もよく聞く。日本人に向けた翻訳であれば、外国語の実力に加えて、日本語で表現するための知識、調査力、文章力が求められる。

仕事場

フリーランスに限って言えば在宅・SOHOが主流。ここ10年ほどの間にコンピュータなくしては仕事が成立しなくなってきた。加えて電話・ファクスも現状では必需品。

スキャナを使用した原書や原文のテキスト化、個人辞書の作成など、さまざまな手法を用いてスピードを上げ、仕事の効率化を図る人も多い。

インターネットだけでなく、辞書など紙媒体の資料を必要とするため、基本的なものは個人で購入し、第二の資料室として身近な図書館や書店を活用している。

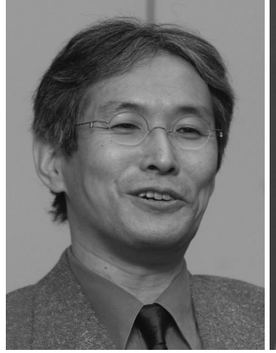
収入

ジャンルと雇用形態によって異なる。ただし、性別と年齢による差はない。

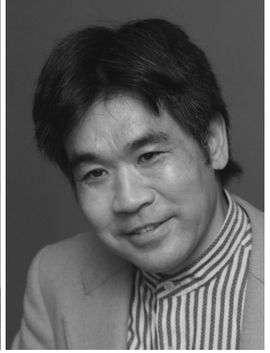
能力の高い人には仕事が途切れず、収入も上がっていくという、実力本位の世界。ただし、印税形式をとっている出版翻訳だけは販売部数が収入に直結するため、収入に関してはその限りではない。しかし能力の高い人への依頼が集中するのはほかのジャンルと同じである。

スペシャル対談

酒井昭伸 vs 中村 融



さかい・あきのぶ
1956年生まれ。ＳＦを中心に、英米文学翻訳家として活躍中。訳書に、ダン・シモンズ「ハイペリオン」4部作、デイヴィッド・ブリン「知性化の嵐」3部作、ジョージ・Ｒ・Ｒ・マーティン『タフの方舟』、マイクル・クライトン『ジュラシック・パーク』（以上、ハヤカワ文庫）、エリック・ガルシア『さらば、愛しき鉤爪』（ヴィレッジブックス）ほか多数。



なかむら・とおる
1960年生まれ。SFを中心にした英米文学翻訳家であるとともに、SF・ファンタジー評論家、アンソロジストとしても知られている。訳書に、Ｈ・Ｇ・ウェルズ『宇宙戦争』（創元SF文庫）、レイ・ブラッドベリ『塵よりよみがえり』（河出文庫）、リン・カーター『ファンタジーの歴史』（東京創元社）ほか。編訳書に『影が行く――ホラーSF傑作選』（創元SF文庫）ほか。

プロが認めるプロの技

元来、影武者のような存在である翻訳家。注目を浴びることも、ファンがつくことも少ないが、特定のジャンルで絶大な信頼を集め、固定のファンを持つ翻訳家もいる。ダン・シモンズ、マイクル・クライトンなどの翻訳で知られる酒井昭伸さんも、ＳＦの世界でファンから強く支持されている翻訳家のひとりだ。今回、酒井ファンを自称する翻訳家・中村融さんが、そのプロの技の秘密に迫る。前代未聞の特別対談。ぜひご堪能を。

構成・文：長澤國雄
司会進行：坂本久恵

翻訳とは作家の頭に自分の頭を近づけること

――中村さんから見た、酒井翻訳のすごさというのは、どういうところでしょう？

中村　翻訳というのは言葉の置き換えだと思っている人が多いですよね。僕自身もかつては、言葉を一つひとつ丁寧に置き換えていけば完璧な翻訳ができると思っていました。でも、そのうちにそれは幻想であることが分かってくる。翻訳は、原作を完璧に理解してそれを日本語でどう表現するかということだから、むしろ作者の頭に自分の頭の内容を近づけることなんです。ただし、１００パーセント重なることは絶対にありえません。だから、原文が10だとしたら、翻訳はどんなにがんばっても9にしかならない。2つの言語の間にある表現不能なニュアンスを考えると、さらに1落ちて8にしかなりません。どんなに立派な翻訳でもそう。でも、酒井さんは、原文にある要素をふくらませることによって8を10に近づける、あるいは11、12にすることができる翻訳家なんですよ。

酒井　そうかなあ（笑）。

中村　いや、ほんとに。酒井さんのいちばん新しい訳書で、ダン・シモンズの『イリアム』『オリュンポス』という作品がありますが、原文では、人物の視点によって、メートル法とヤード法の表記が混在して出てきます。アメリカの読者はメートル法をすごくいやがるから、それをわざわざ使うということは、作者が明らかにそこで違和感を出そうとしているわけです。酒井さんは作者のその意図を汲んで、例えば普通は「数百」と漢数字で書くところを、「数一〇〇」という表記にして違和感を出しています。つまり、原文にある要素をふくらませている。常にそういうことをされているんですよね。

酒井　それが良いか悪いかとなるとまた別で、「読みにくかった」と言われちゃうこともあるんですよ。でも、この場合は「読みにくく」したかったわけだから、心の中で「ありがとう」と言いますけどね（笑）。

中村　原文をふくらませると言うと、勘違いをして、原文にないものをくっつけて訳す人がいますが、そうではなく、もともとある要素をふくらませるということです。別の例を挙げましょう。『タフの方舟』という作品がありますが、この主人公がいやったらしい商人で、バカ丁寧なしゃべり方をして相手をバカにする人なんです。確かに英語でもものすごい丁寧語で書かれているんですが、酒井さんは、これも見事に訳しています。「手前」という一人称を選ぶという発想自体がすごいなあと思いますね。

> “I would venture that the title 'criminal' is more applicable to you than to myself, but perhaps that is not to the point. No, I am not mocking you. You appear to be upset. Under such conditions it would be folly to mock you, and I am not given to folly.”――TUF VOYAGING George R.R. Martin

『“犯罪者”呼ばわりがふさわしいのは、手前より貴男ではないかと思わぬではありませんが、ま、それはよろしい。まずは、貴男のおたずねに答えるならば――滅相もない、貴男を愚弄する気など微塵もございません。見ればなにやら血迷っておられるごようす。かかる状況で貴男を侮辱するなど、愚行以外のなにものでもありますまい。手前は愚行を犯すつもりなど毛頭ございませんのでね」

――『タフの方舟 2　天の果実』
（ジョージ・Ｒ・Ｒ・マーティン著／酒井昭伸訳／ハヤカワ文庫）

酒井　それも善し悪しで、原文を読んだ人は、翻訳を読んで「こうじゃなかった」と思うかもしれない。そういう〝やりすぎ傾向〟はちょっとあるなと自分で思いますよ。例えば10人のキャラクターが集まって話す場面では、「～が言った」という表現がいちいち入るとうるさいので、それを避けるために、ある程度、口調だけで誰のセリフか分かるようにしないといけない。そのうち口調だけだと分かりにくいから主語も変えよう、と考える。だからと言って、そこに「手前」を持ってくると、原文とちょっと離れてしまう。その、離れちゃうかどうかというところで毎回悩みます。普通はなんとか〝寸止め〟にしているんですけど、時々当てちゃってますね（笑）。

――実際に酒井さんの訳文を原文と比較すると、一見飛躍しているようでも、もう一度原文に戻って読んでみると、すごく納得できるんですよね。

中村　もともと原文に含まれている要素で、日本人が読んでも見えない、でもネイティブが読むと分かる部分を、酒井さんは演出しているんだと思います。Ｉを「手前」にするというのは、普通に考えたらちょっと変だけど、原文をよーく読んで内容を理解すると、「手前」以外ありえないということが分かるんですよ。ダン・シモンズの

中村……一人称を出さずに訳すなんて、どうしたらできるんですか？

それは、できるかできないかじゃなく、やるかやらないかですよ……酒井

SF翻訳家が披露する超絶技巧！

通訳を教える人に聞く

リプロダクションが半分も できなかったら、英語はやり直し

めざす力

鳥飼玖美子先生といえば、ある人はアポロ11号の月面着陸や大阪万博などの大きな国際舞台で活躍された同時通訳者の草分けとして、またある人は、NHK英語教育番組の講師として長年活躍された姿を思い浮かべることだろう。現在、立教大学で後進を育てていらっしゃる先生に、通訳者として必要な資質、能力、そしてそれらをどう身につけていくべきかをうかがった。

鳥飼玖美子

プロフィール／とりかいくみこ
上智大学外国語学部卒業。コロンビア大学大学院修士課程修了（MA）。英国サウサンプトン大学大学院人文学研究科博士課程修了（Ph.D.）博士論文：Diplomatic Interpreters in Post-World War II Japan: Voices of the Invisible Presence in Foreign Relations（Unpublished Ph.D. thesis, 2006, University of Southampton）。会議通訳者を経て、1997年より立教大学教授。NHKテレビ「英会話」講師。国語審議会委員、観光政策審議会委員、日本ユネスコ国内委員会委員、国立国語研究所評議員等を歴任。日本通訳学会会長。国際翻訳・異文化研究学会（IATIS）理事。東京大学大学院教育学研究科客員教授。著書に『歴史を変えた誤訳』（新潮文庫）、『プロ英語入門』（講談社インターナショナル）など多数。近刊に「通訳者と戦後日米関係」（みすず書房より7月刊行予定）。

リプロダクションがどれくらいできるか

通訳者になろうとした場合、英語力がここまであれば、という目安になるものはあるのでしょうか。

鳥飼　通訳者になるということは、その時点で2言語に精通していることが最低条件です。例えば、TOEICなら900点は必要ですし、従来のペーパーTOEFLなら650点はほしいところ。そこから通訳者としての訓練が始まるということです。

自分の英語力がどのくらいかを自分で確かめるいい方法があります。それはreproduction、つまり「再生」ですね。あるまとまった量の、時間でいうと2～3分の英語を聞いてそっくり再生するのです。メモを取ってはいけません。これは要するに、英語を理解する力＝リスニング力、それを再生する力＝スピーキング力、はもちろん、文法力、語彙力、内容を理解する力、すべてがないとできないものです。

半分もできなかったら英語はやり直しですね。細かいところは落ちたけれど、内容がほぼきちんとした英語で再生できたら、通訳のできるレベルに達していると言えます。これは本当に難しいですよ。ちょっとしたストーリーになっているものや、ニュースなどの素材があれば、自分ですぐにできるものです。それでやってみて、自分の再生したものを録音して聞いてみれば、どのくらいできているか簡単に分かります。

内容をどれくらい理解しているか

英語力を身につけたうえで大切になってくる能力というのは、どんなものでしょうか。

鳥飼　通訳者にとって必要なのは、第一に「理解力」です。それはつまり言語能力――リスニング力、語彙力、文法力、あるいはいろいろなフレーズや慣用句を知っているとか、その他諸々の言語知識が半分。あとの半分は何かというと、「内容を理解する力」なんです。言葉だけ分かっても内容が分からなければ本当にいい通訳はできません。通訳者が分からなかったら聞いている人が分かるはずがありませんから。

ですから、通訳をするとなったら、その内容に関する資料をとにかくたくさん、チラシの類でもいいから、集められるだけ集めて勉強します。つまり、その分野の知識を理解しようとすること。もちろん、その分野特有の専門用語も勉強します。

どの分野の仕事が来るか分からないわけですから、通訳者は常に網を張って、あらゆるジャンルの知識を吸収し続けなければなりません。終わりがないんです。だから勉強が嫌いな人は通訳者には向きません。年中、受験勉強のような日々ですから。大学で学ぶ一般教養的知識から、最新の国際情勢、科学的進歩に関するもの、技術革新の話、あるいは英日通訳者の場合なら英語圏の文化的常識など。聖書やギリシャ神話、マザーグース、あるいはシェークスピアなどですね。私たちが同じように身につけることは不可能ですが、少しでもそれらを知るために、小説を読んだり、映画を見たり、辞書を調べたりと、努力して身につける必要があります。怖いのは、国際会議などや大きな講演会などであっても、スピーカーがいきなりスピーチを始めることはまれで、最初にちょっとしたジョークや引用をすることがよくあることです。そういうところにブラウニングの詩がぽっと使われたりするんです。もちろんその部分は原稿には含まれていません。

そういう知識を増やすには英語で読んだほうがいいのでしょうか。

鳥飼　日本語と両方ですね。英語でばかり読んでいても、それを日本語でどう言うか知っていないといけませんから。英語ですと、アメリカで出版されているもので、そういう知識が1冊にまとまったいい書籍があります。『The New Dictionary of Cultural Literacy―What Every American Needs to Know』などがおすすめですね。

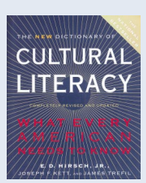
聞き取れないときは「分析力」がものをいう

それでもどうしても分からない言葉が出てきてしまったら、プロの通訳者の方々はどう対処されているのでしょうか。

鳥飼　通訳者にとって最悪なのは「分かりません」です。それを言ったらおしまいで、口が裂けてもそれは言いません。でも、どんなベテランであっても聞き取れない言葉、知らない単語はあるものです。それに、たまたまマイクの調子が悪くて雑音が入ったとか、誰かが大きな咳をしたとか、アクシデントもままあること。そういうときは、前後の文脈から推測していきま

わたしが薦める本

The Interpreter's Resource
Mary Phelan, Multilingual Matters LTD
通訳者の世界の全体を知るのに最適な書。通訳の歴史、会議通訳、同時通訳、電話通訳などさまざまな仕事の形、コミュニティ・法廷・医療などの通訳、さらにはEUや国連を始めとする国際機関における通訳の現状などを網羅。



The New Dictionary of Cultural Literacy ―What Every American Needs to Know
E.D.Hirsch Jr., et al., Houghton Mifflin
副題「すべてのアメリカ人が知っておくべきこと」のとおり、英語文化圏の常識7000項目を、聖書や神話、文学、地理、イディオム、英文学など23の分野ごとにアルファベット順に解説。英語を使う人、学ぶ人には必携の書。

訳者　枝廣 淳子（えだひろ じゅんこ）

Profile 東京大学大学院教育心理学専攻修士課程修了。環境ジャーナリスト。２つの会社を経営する傍ら執筆、講演、翻訳、環境NGO運営など、環境を軸にマルチキャリアを展開中。主な著書に『地球のためにわたしができること』『地球のなおし方』『朝２時起きで、なんでもできる！』、訳書に『不都合な真実』ほか多数。

不都合な真実

アメリカ元副大統領が長年の研究成果のすべてを開示した人類への警告の書！

ノンフィクション

1年ほど前、米国出張中に映画『不都合な真実』を観て大変感動しました。書店に平積みになっている同タイトルの書籍を見ながら、「いいなあ、誰が翻訳するのかなあ」と思っていたのでとても幸せです。

まるで写真集みたいな本で、英語はとってもシンプルでありながら、メッセージ性が強い。どうやってシンプルかつメッセージ性の強い日本語にしようか――楽しい苦しみでした。分量が少ないと思って「25日後に〆切」（うち丸1日空いている日は4日しかなかった）でも引き受けたのですが、フタを開けてみると日本語で約13万文字と、かなりの分量でした！

温暖化のしくみや現状、地球への影響や今後の見通し、解決策についての最新の科学的情報が分かりやすく説明されているので、自分の参考用にも人に説明するためにもとても便利です。加えて、著者のヒューマン・ストーリーが心を打ちます。その両方がうまくバランスを取りながら、多くの人々に届くように構成されており、「いかに伝えるか」という観点からも大変に参考になります。ゴア氏の「まだ間に合う。変えていこう！」という力強い希望のメッセージを伝えられたらうれしいです。

著者　アル・ゴア	ランダムハウス講談社　2,940円（税込）　2007年1月発行　382ページ

訳者　宮本 喜一（みやもと よしかず）

Profile 翻訳家、ジャーナリスト。一橋大学卒。ソニー、マイクロソフトを経て、98年より翻訳に従事。『ジャック・ウェルチ わが経営（上・下）』（日本経済新聞出版）、『トム・ピーターズのマニフェスト（全４巻）』（ランダムハウス講談社）をはじめ、ビジネス書の訳書多数。著書に『マツダはなぜ、よみがえったのか？』（日経BP社）がある。

ビジョナリー・ピープル

世界200人以上のインタビューから見えてくる、時代を切り拓く人々の人生の原理

ノンフィクション

著者が『ビジョナリー・カンパニー』の共著者のひとりであり、ウォートン・ビジネススクールから出版されていることもあって、本書は書店の店頭でビジネス書として分類されています。とはいえ、その内容は、いわゆる企業ものとは趣を異にし、テーマを企業から人そのものに拡大しているため、年齢・性別を問わず幅広い層の人たちが楽しめる内容になっているのではないでしょうか。

本書では、世の中に影響を与え続けている人たちの生きざま、仕事や人生に対する姿勢を、著者3人が丁寧に分析・提示しています。読者がそこから何を学び取るのかが、本書の面白さと言えるのかもしれません。したがって、ビジネス書よりも幅広い読者層を頭に置いて翻訳の作業をしたつもりです。本書にある表現を拝借すれば、読者に向かって「著者には答えがあるぞ」という高い位置から語るような雰囲気は極力排除し、どちらかと言えば、読者と同じ目線になるように心掛けました。その意味では、これから社会人として世の中に出て行こうという若者に手にしていただきたい一冊です。

著者　ジェリー・ポラス　スチュワート・エメリー　マーク・トンプソン	英治出版　1,995円（税込）　2007年4月発行　408ページ

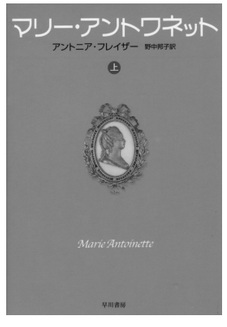
訳者　野中 邦子（のなか くにこ）

Profile 東京生まれ。多摩美術大学卒。編集業を経て、現在は英米文芸書の翻訳に従事。主な訳書に『トルーマン・カポーティ（上・下）』（新潮社）、『悪魔と博覧会』（文藝春秋）、『フェルメールの受胎告知』（白水社）ほか多数。

マリー・アントワネット（上・下）

悲劇の王妃アントワネットの真実の姿を膨大な資料から描き出した歴史ノンフィクション

ノンフィクション



翻訳中、特に心掛けたのは、できるだけ平易な言葉づかいをすることでした。髪に粉をふったり、頬紅を真っ赤に塗ったり、大勢の人に見学されながら出産したりする風変わりな18世紀フランス宮廷の生活です。国王が自分を呼ぶときは、まさか「余は」とか言うのでしょうか？でも、著者が描こうとしたのは、14歳で嫁入りし、重圧の中で必死に生き抜こうとした、ちょっと軽い、でも無邪気な、遊び好きの女性の生涯でした。ソフィア・コッポラ監督がキルスティン・ダンストを主演にして描こうとしたのも、ひょんなことからセレブになって脚光を浴びてしまったティーンエージャーの物語です。

だからこそ、現代的な息吹を感じさせ、なおかつ上品な文章にしたいと思いました。母への愛憎入り混じった感情や、嫁ぎ先での複雑な人間関係、公的な義務と私生活のぶつかり合い、ロマンチックな恋への憧れなど、今に通じるドラマが満載なのですから。

もちろん歴史ノンフィクションにつきものの固有名詞の表記、それに登場人物の多さには苦労しました……が、まあ、それはいつものこと。

著者　アントニア・フレイザー	早川書房　各巻750円（税込）　2006年12月発行　（上）454ページ　（下）429ページ

訳者　桐谷 知未（きりや ともみ）

Profile 翻訳家。東京都出身。南イリノイ大学ジャーナリズム学科卒。訳書に『シリコンバレー式で医療費は安くなるのか』（オープンナレッジ）がある。

それでも家族を愛してる　自分らしい“家族”を見つけ出した19の物語

家族の絆とは？ 多様な家族のあり方を通して家族愛の問題に迫る感動ノンフィクション

ノンフィクション

この本には、出身地も境遇もさまざまに異なる人々が登場します。例えば、インドの厳格な家庭に育ち、ほとんど見も知らない男と結婚させられる女性。政治紛争の絶えない北アイルランドに住み、民兵組織のテロリストを夫に持つ女性。ふたりの人生は小説のように波瀾万丈ですが、どちらも自分の意志で教育を受けて広い世界を知り、伝統や偏見に縛られない生き方を学んでいきます。それが家族のあり方をも変えていくのです。

著者は、登場人物一人ひとりの目線を大切にして物語を進めながら、全体の中に普遍的な家族の姿を見つけようとします。しかしその目的は、型にはめることではなく、むしろ家族という固定観念からの解放なのです。短編小説とジャーナリズムの両方の要素を持つこの本を訳出するうえでは、すらすら読める物語の流れを作ることと、著者の想いをきちんと伝えることのバランスを取るのにとりわけ苦心しました。著者の言葉へのこだわりと熱い主張に圧倒され、息も絶え絶えの日々でしたが、全力を注ぎ込むことができたこの初訳書には特別の思い入れがあります。

著者　ポー・ブロンソン	アスペクト　2,310円（税込）　2006年10月発行　488ページ